

日本国家は国民を守ってきたか～真の平和と自由を願って

＝生前の原稿より＝ 日本聖公会北海道教区司祭バルナバ小貫雅夫

* その1

私の父母、小貫安貞・富美子は、日本聖公会銚子諸聖徒教会で植松誠主教のお母様の父松本正雄師父司式で結婚。新任地北海道留萌聖公会に奉職。1928年（昭和3年）5月長男嗣夫誕生。第二の任地釧路聖パウロ教会で1930年（昭和5年）11月二男の私が誕生した。その後第三の任地深川聖公会に奉職。

日本の軍部は昭和に入りソ連を強く意識し始め、満州に関東軍を送り込み、満州全域を日本の手の内に入れようとした。1931年（昭和6年）9月、満州奉天（現際の瀋陽）の東北地方柳条湖付近の満州鉄道爆破事件を発端に満州事変を引き起こし、「満州国」建国への道を開いた。そのころ両親は、多分、設立されたばかりの煉瓦造りの立派な奉天聖公会の牧師任務を命ぜられ赴任した。1933年（昭和8年）7月3日、三男勇作誕生。そのころ日本政府の奨励で、日本人が続々新天地を切り拓くべく満州に渡った。そして、満州国全域を関東軍の支配下におさめた。五族（日・満・漢・蒙・朝）協和王道楽上をモットーに、実態は日本植民地であった。

私が小学校一年生の時、父は牧師としてではなく、上海YMCAの主事として就任した。1937年（昭和12年）小学一年だった私が鮮明に記憶している「シーン」がある。七夕祭りの7月7日であった。YMCAの建物は、地下2階が事務所、3、4階が住宅。私が4階の風呂に入っていると、下の道路からけたたましい爆音を耳にした。実は、YMCA建物の近くに日本軍司令部の建造物があった。何事かと窓から見下ろすと、広い街道を陸戦部隊が小型戦車などと多数の日本兵が隊列をなし、銃を持って走りながら進軍するのが見えた。あの大きな爆音は日本軍の手にあった郊外の盧溝橋事件で、日本軍は上海を占領、更に南京へと戦火を広めた。日中戦争の始まりであった。

住処の周辺あちこちに砲弾が散り、日常生活は不可能、日本人家族はいち早く上海を離れることを余儀なくされた。父の仕事は責任がありなかなか離れにくかったが、中国の戦争が長引くことを予想し、上海引き揚げを決心、旧満州中心部の新京（現在の長春）に避難し、「満州共和会」：五族共和・民族共に力を合わせて国造りをしよう・・・の仕事に就いたが、間もなく、その仕事に問題を感じ辞めた。そして、新京郊外に畑を借り、百姓農業を始める。四男耕喜はこの頃（1939年（昭和14年）8月16日）誕生。労働馬二頭も飼い、秋の収穫時には、南瓜、じゃがいも等多種収穫物を荷馬車に積み、母と一緒に市街地住民に売りに行った。私は小学卒業、新京一中入学間近。

日米開戦は世界戦争に拡大、南国諸島周辺の戦火拡大、日本国内が苦境に立たされるなど知るすべもない。牧師が牧師を本職にすることは多難の業。家族を養うのに精一杯であった。兄の嗣夫は、中学2年生頃、結核性肋膜炎と腹膜炎で学業中退、入院、静養。日本が弱体に瀕しているなど知る由もない。

* その2

すでに述べた状況にあって、1945年（昭和20年）に入り夏を迎えようとしていた。南太平洋激戦、沖縄上陸殺戮など知るはずもない。すでに満州を支配下に治めていた関東軍も防衛のソ満国境を捨て、南下した。許し難いことに、国境近くに生活していた中学生・軍属の子弟家族は、軍が準備した迎えの列車で8月以前に南下し、すでに博多へ送り返していたという。いわゆる国境守備隊である。彼らの囚兵として発動を命じられたのが、新京一中3年生（15歳）の僕たち128名と引率の小川・斎藤教官2名である。全くの非戦闘員の少年たちにソ満国境報国農場への発動命令である。発動が1945年5月20日に出され、7月29日までの約2か月間の動員ということであった。ソ連領がはるか先に見える国境線鳥蛇溝河にソ連監視塔が見える。その手前には広大な水田、畑が広がり、日本軍司令部農場本部がある。広域の国境線には、満州に渡った民間招集兵や内地からの出征兵士たち多数も残留、守備していた。上部関東軍の戦略とは知らず、彼らが放置状態に去った国境に向け、僕たちは牡丹江経由の貨車で向かった。報国農場での農作業と毎日欠かせない食糧生産と備蓄に始まり、すでに大本営通達によるソ連参戦、間近い通達に備えて少年たちへの厳しい軍事教練も必至であった。長い国境線の弾豪の中で爆弾を抱えて、65名ずつ二班に分かれて攻撃に備える訓練や戦車隊出動訓練など厳しく行われた。新京一中生徒の大方は、軍属の子弟ではなく民間の子弟であったのに。2か月の勤労働員と言われたはずが、7月末過ぎても本部からの「帰還命令」は全くないどころか、更に延期され、約束破棄、戦略的放置状態の国境に捨て駒同様に釘付けにされた。広島、長崎の原爆投下、大阪大空襲、何ひとつ知らされなかった。関東軍による「満州放棄作戦」に自分たちが使われているなど、自分たちは知るはずもなかった。いよいよ、ソ連が未明の宣戦布告。首都新京、牡丹江、吉林への戦闘機による爆撃を開始した。不吉な戦闘機が国境の頭上を越えていく事態に、一刻も早く非難しなければならなくなった。砲弾の炸裂音が頭上を飛び交う中、8月9日未明の逃避行となった。東寧駅からの鉄道はすでに爆破され、列車普通、徒歩による逃避行は、迫りくる戦車に怯えながら山中を進む以外にすべはなかった。手持ちの手ぬぐいを隊の背中のリュックに結びつけ、二班の教官の後ろからはぐれぬように真夜中の飛行を続けた。山中、開拓農民の日本の母親が乳飲み子を背に、道端に疲れ果て屈み込む姿を見ても、同様に疲労し切った自分には助ける力もなかった。また、日本の陸軍兵義勇隊が、後方から攻めてくるソ連の戦車攻撃に備えて、地雷を山道のあちこちに埋めているのに出会った。150キロの逃避行は想像に絶する。疲労の限界をはるかに超え、蜂刺されや下痢症状に悩まされ、落伍者が続出するのを支え合いながら何とか牡丹江まで辿り着けば、列車に乗れるかもと唯一の望みを託し行進。日暮れ短く、寒さも忍び寄る山中を、背後から迫る爆音に怯えながら歩き続けた。安全な谷川の河原に出ると身を隠し、枯れ木を集め、手持ちの食材を飯盒で炊き飢えを満たす。日は暮れ、自分の麻袋や毛布に身を隠し、一夜の眠りにつく。

やっと8月末、東京城（とんきんじょう）に辿り着けた時のこと。大勢のソ連駐留軍の手の内に足止めを食らった。また、日本陸戦部隊義勇軍も即連れてこられ、ソ連進駐部隊の目前で、手持ちの拳銃、武器、所持品全てを没収された。間もなく、我々全員を警備兵監視

のもと東京城南へ12キロ歩かされ、警備兵が自動小銃で威嚇する中、馬蓮河の開拓団に連行、倉庫や建物に収容された。そこに800名余りの終戦も知らされない日本義勇兵も捕虜として連行、開拓団の畑に鉄条網を張り巡らす重労働を強要され、その囲いの中に収容された。広い大陸に秋も忍び寄る日々、自力で作った草覆いの小屋に夜露に濡れ、困憊しきった体を横たえ、味も素っ気もない高粱粥をすすする匙もなく、見つけたアルミ電線で作った匙ですすった。夜間になると少年警備兵の目を盗み鉄条網を抜け出し、畑の瓜やトウモロコシをあさるも、畑で拾えるものはわずか、数日後には、そこからさらに離れた東京都市街の集落、開拓団が去った後の煉瓦造りで広い開拓会館二階建て建物の中に移り収容された。そこにも日本人敗残兵500名ほどが収容されており、あのソ満国境にそのまま守備残留、尚且つ、あの山中逃避行中に地雷をながめながらトラックで通り過ぎて行った日本人部隊であったし、僕たちに問いかけてきた何人かは新京一中生の先輩であるのに驚いた。ここにきて初めて濁りはてたドラム缶の風呂に浸かり、シラミやノミ退治もできた。何人も入るので、みそ汁のような濁り湯だった。出される食事は相変わらず家畜飼料用高粱と粟。近くの焼却場で掘り出したしょっぱい灰を塩代わりになめた。バッタやコオロギ、タニシを捕獲し食べた。そこでの捕虜生活に耐えられなくなった同僚の4名が在る夜、監視の目を盗み脱出を図った。ある日小川教官は、新京に情報収集に戻った折、家族がすでに新京を離れ、朝鮮経由の途中命を落としたことを知らされ、急遽その後を追った。残された斎藤教官もまた、シベリアへ送還となり、子どもたちのみが収容所に残されてしまった。

満州の冬が忍び寄る10月中旬・・・「新京一中生120名全員を解放する！」との帰還命令が出された。新京で待ちわびる家族たちの交渉の末、牡丹江駅まで出れば、ハルピン駅への貨車に乗れる見通しがついた。頼りの教官を失い、衰弱しきった仲間を日本の陸軍野戦病院に預け、北方回り、牡丹江目指しての逃避行が始まった。途中疲労困憊し、石頭という満人部落に入り、村長たちに助けを求めた末、親切に一夜の宿を引き受けてくれ、親切な食事のもてなしがどんなに嬉しかったことか。懐かしいマントウ・餃子・スープ等、感動と涙を抑えることができなかった。夜は皆で体を寄せ合いながら、温かなオンドルの部屋でぐっすり眠れた。翌朝、お世話になった家族に別れを惜しみつつ、再度、行軍の途に再び牡丹江駅を目指して辿り着けた。

後でわかったことだが、先に脱走した生徒4名は、ハルピンまでの途中、残留部隊トラックに出会い、助けを求め無事親の待つ新京に帰り着けたため、親たちの懸命な計らいで牡丹江駅目指し飛行を続ける子どもたちの救出を軍本部に掛け合っていた。そのお陰で、駅到着後は日本人避難家族と一緒に屋根なしの貨車に乗ることができた。車上では、持ち合わせのズックや毛布、兵隊が置き去りのコートで身を覆い、夢に見た新京に辿り着くことができた。この難関の逃避行に耐え抜いた仲間たちは近い再会を約束し、各自は瘦細り、ふらふらの体と足を引きずり引きずり、親の待つ家路に着いた。私の母の話では、「雅夫は、意識なくアフリカの骨と皮ばかりに痩せ細った姿だった。リュックの中は空っぽで、アルミ線の匙一本だった。」とのこと。まさに、この姿が関東軍の囚兵にさせられた、新京一中生（14～15歳）と教官130名の非現実とも思える体験である。